


副 本

## 陳 述 書

平成 27 年 12 月 17 日

住所

氏名

海江田 万里 

- 1 「今どうすれば一番損をしないか」(甲4)について
- (1) 「今どうすれば一番損をしないか」の出版が企画された経緯、企画の具体的内容について
- 「今どうすれば一番損をしないか」は、青春出版社から出版された書籍です。私は、青春出版社で、野末陳平氏との共著で「頭のいい税金の本」、「頭のいい銀行利用法」などの書籍を出しており、また、同社の「BIG TOMORROW」という雑誌にも連載していました。そのような経緯があったので、同社から私に対して、「今どうすれば一番損をしないか」の企画をいただいたのだと思います。
- 企画の内容としては、当時の流行であった「財テク」に関して、「BIG TOMORROW」に連載中の記事を集めて、書籍化しようという内容であったと思います。
- (2) 「今どうすれば一番損をしないか」で安愚楽牧場のことを取り上げるに至った具体的経緯
- 私は、上記のとおり、青春出版社の「BIG TOMORROW」という雑誌で連載していました。
- 調べてみたところ、「BIG TOMORROW」昭和61年3月号で、マネーゲームの対象の一つとして「和牛預託オーナー制度」を紹介し、その一例として安愚楽牧場を紹介していました。
- 「今どうすれば一番損をしないか」で安愚楽牧場のことを取り上げるに至ったのは、同じ青春出版社の雑誌「BIG TOMORROW」での連載記事をまとめて書籍化するに当たり、青春出版社の担当者の目にとまったからであろうと思います。
- なお、私が安愚楽牧場について雑誌に取り上げたのは、「BIG TOMORROW」が初めてであったと思います。私は、平成27年11月4日付の私の陳述書で、「安愚楽牧場について初めて知ったのは、昭和63年頃であったと思います。」と書きましたが、これは「昭和61年頃」の誤りでしたので、修正します。何分にも30年近く前のことで、記憶に曖昧な点があることを了承いただきたく思います。
- (3) 「今どうすれば一番損をしないか」を執筆するに際して、安愚楽牧場に

ついて行った調査や取材の具体的内容、編集部との打合せ内容、安愚楽牧場との連絡の有無について

この点について述べる前に、私が「BIG TOMORROW」昭和61年3月号で安愚楽牧場を取り上げたときの調査や取材の具体的内容、経緯等を述べたいと思います。

前の陳述書にも書きましたが、昭和61年頃には、私の事務所に何人かのフリーのジャーナリストが出入りして、各種情報を持ち寄っており、その中で安愚楽牧場の話が出ました。その場で、私も折込の広告を見た記憶があります。これは、面白そうだという話になり、私が調べてみることにになりました。

その後、私は、安愚楽牧場に電話して、牛が肥育途中で病死したなどの場合でも、牛一頭一頭に保険をかけており、保険金が下りるので心配はないとの回答をもらいました。また、担当者からは、「牛一頭一頭の耳にナンバリングをして、自分が投資した牛がどれかが分かるようになっている。」「オーナー制度の目的は、都会の人に那須の牧場に来ていただくことにもあり、都市と農村の交流の場を設けることも大切にしたい。」という話も聞きました。また、安愚楽牧場がどの程度信頼のおける牧場であるか調べるために栃木県の友人に電話をし、「長い歴史のある牧場で多くの牛の肥育を行っている実績がある。」との返事をもらったのもこのときのことであると思います。

以上のような調査、取材を行った上で、「BIG TOMORROW」昭和61年3月号の連載記事が執筆されています。「BIG TOMORROW」は当時の多くの雑誌と同じく、視覚化に重点を置いた制作スタイルで制作されていました。このような視覚化に重点を置いた制作スタイルでは、デザイナーが写真や題字などの場所を紙面に割り付けていきながら、記事の場所と字数を決めることとなりますので、アンカーマンがデザイナーの決めた字数で記事をまとめ上げる必要があります。そのため、私がデータマンに題材と内容を口頭で説明して、データマンがデータ原稿に起こして、最後にアンカーマンが、デザイナーが割り付けをした行数に応じて、データ原稿を取捨選択して記事にまとめるというスタイルで雑誌が制作されていました。

「今どうすれば一番損をしないか」は、「BIG TOMORROW」昭和61年3月号などの雑誌記事をまとめて書籍化したものでした。私の場合、この時期に出版した書籍は、一から書き下ろすということはほとんどなく、出版社の担当者が関連する資料を集めてくれて、私がそれに対して説明をし、それに基づいて出版社側である程度原稿を作ってくれて、私が誤字脱字や表現等について若干手を加えるという形で執筆作業を行う流れになっていたと思います。「今どうすれば一番損をしないか」は昭和62年に出版されており、昭和61年3月頃の雑誌記事の執筆から経済情勢も大きく変化してはいなかったと思われますので、「今どうすれば一番

損をしないか」の出版に際して新たな調査はしていないと思います。

- (4) 「今どうすれば一番損をしないか」の発行部数、発行時期、印税収入額について

「今どうすれば一番損をしないか」の出版は昭和62年であり、出版から30年近くが経過しようとしていますので、当時の担当者も会社を辞めており、正確な発行部数を確認することはできませんが、この本については、出版社も販売に力を入れてくれた記憶があり、ある程度は売れたと思います。

発行時期は、「今どうすれば一番損をしないか」の奥付では、昭和62年6月に一刷となっていますので、その少し後には書店に並んだのではないかと思います。

印税収入額についても正確な額は分かりませんが、書籍の場合の一般的な印税額は1冊の単価の8～10%程度でした。

- (5) 「今どうすれば一番損をしないか」の改訂作業の有無について

「今どうすれば一番損をしないか」は、改訂作業をしていないと思います。

- (6) 「今どうすれば一番損をしないか」で安愚楽共済牧場（当時）の電話番号を掲載した理由について

前の陳述書にも書いたとおり、「BIG TOMORROW」昭和61年3月号の掲載当時は、電話番号くらいは読者が自分で調べればいい、との思いで記事中には掲載しませんでした。しかし、「BIG TOMORROW」の記事を掲載した後に、担当者から、記事を読んで興味を持った人が雑誌の編集部にお問い合わせをしてくるが、編集部の人にも忙しく、そのような電話にいちいち対応できないという話を聞きました。編集部との相談の結果、書籍化に際しては電話番号を書いた方が手間が省けるとの判断で、電話番号を記載することとしました。

## 2 「危機を乗り越える財テク」（甲5）について

- (1) 「危機を乗り越える財テク」の出版が企画された経緯、企画の具体的内容について

「危機を乗り越える財テク」の出版社は講談社ですが、当時講談社の雑誌で連載していたなどのつながりはありませんでした。しかし、出版社各社に個人的な友人がいましたので、おそらくその友人のついでに書籍の編集部の人から私の雑誌連載や他の書籍を見て「財テク」に関する書籍を作る企画を立て、私に話を持ってきたのだと思います。

- (2) 「危機を乗り越える財テク」で安愚楽牧場のことを取り上げるに至った具体的経緯

前述のように「危機を乗り越える財テク」の場合も私が一から書き下ろすということはほとんどなく、出版社の担当者が面白そうだと思う題材を取り上げて書籍の大体の構成を決めますので、出版社の担当者が私の過去の

記事などを見て安愚楽牧場のことを面白いと思い、「危機を乗り越える財テク」でも取り上げることとなったのだと思います。

- (3) 「危機を乗り越える財テク」を執筆するに際して、安愚楽牧場について行った調査や取材の具体的内容、編集部との打合せ内容、安愚楽牧場との連絡の有無について

上記のとおり、「BIG TOMORROW」昭和61年3月号で安愚楽牧場を取り上げる前には調査と取材を行いました。が、「危機を乗り越える財テク」の執筆に際しては、新たな調査又は取材はしていないと思います。

- (4) 「危機を乗り越える財テク」の発行部数、発行時期、印税収入額について  
「危機を乗り越える財テク」の正確な発行部数を確認することはできませんが、この本もその年のベストセラーになったという記憶はありませんので、1000～2000部程度の発行部数ではないかと思っています。

発行時期は、昭和63年1月に一刷となっていますので、その少し後には書店に並んだのではないかと思っています。

印税収入額についても正確な額は分かりませんが、書籍の場合の一般的な印税額は1冊の単価の8～10%程度だったと思いますので、8万円～20万円程度であったと思います。

- (5) 「危機を乗り越える財テク」の改訂作業の有無

「危機を乗り越える財テク」もそれほど売れた記憶はありませんので、改訂作業はしていないと思います。

### 3 「ビッグマン」昭和63年3月号の掲載記事（甲6）について

- (1) 「ビッグマン」昭和63年3月号の掲載記事で、安愚楽牧場のことを取り上げるに至った具体的経緯

このような雑誌記事を作る場合には、まずは、大抵は電話で雑誌の編集者と粗々の打合せをして、こういうテーマで行こうと決まると、今度はデーターマンと呼ばれる人が私のもとを訪れ、聞き取りを行います。

「ビッグマン」昭和63年3月号に記事が掲載されるに際して、編集者やデーターマンとどのような打合せをしたのかという具体的な記憶はありませんが、私は当時「ビッグマン」では連載していなかったと思いますし、この頃には他の財テク雑誌などでも安愚楽牧場の記事が出ていたと思いますので、編集者が別の雑誌の記事や書籍を目にして、安愚楽牧場での和牛預託オーナー制度に共同馬主を絡めて記事にする企画を立てて、私に話をいただいたのではないかと思っています。

- (2) 「ビッグマン」昭和63年3月号の掲載記事を執筆するに際して、安愚楽牧場について行った調査や取材の具体的内容、編集部との打合せ内容、安愚楽牧場との連絡の有無について

このときも、安愚楽牧場のみに関する新たな調査又は取材はしていないと思います。

もっとも、昭和63年頃にはアメリカから牛肉を輸入するという動きも

ありましたので、安愚楽牧場だけに関連する問題というよりは、日本の食肉業界に関する社会的な問題として、和牛の今後の市場の変化について、食肉事業を長年やっている業者に問い合わせをしたことがありました。この業者の話では、国内の畜産業者の輸入牛肉に対する抵抗が強く、早急には自由化のピッチは上がらないだろうとの話でした。また、食肉業者は、「黒毛和牛と輸入牛肉は味もまるで違うし、別種のものだと思って良い。輸入牛肉が多少入ってきてても、黒毛和牛の値段には関係しない。」という話をしてくれて、この話は今も印象に残っています。事実、アメリカから牛肉の輸入が開始されたばかりの頃は、輸入牛肉を一般の精肉店で販売することができずに、有名ホテルのレストランで「10ドルステーキ」として輸入牛肉を提供したり、日にちを限って大手のスーパーでチルド（冷凍）牛肉を販売している状況でした。

「ビッグマン」昭和63年3月号には、「私は、アメリカ牛と和牛では全く味が違いますので、和牛の需要が激減して価格が下落することはまずないと思います。」との記載があります。これは、上記の調査に基づいて私がデーターマンにそのような話をして、それがアンカーマンに採用されて活字になったものだと思います。

執筆に際しての打合せですが、上記のとおり、「ビッグマン」も一般的な雑誌の制作スタイルであったと思いますので、私がデーターマンに安愚楽牧場について口頭で説明し、それをデーターマンがデーター原稿に起こし、最後にアンカーマンがデーター原稿からデザイナーの決めた字数で記事にするという流れで作成されていたと思います。ただ、このときには既に私が安愚楽牧場について紹介した他の雑誌記事や書籍がありましたので、私からデーターマンに対して口頭で説明をするだけではなく、参考資料として従前の雑誌記事や書籍のコピーを渡したのではないかと思います。

(3) 「ビッグマン」昭和63年3月号の発行部数、原稿の執筆料

当時の「ビッグマン」の発行部数がどの程度であったかは、25年以上が経過した今となっては分かりません。

雑誌の原稿料は、この当時、一般的に1回につき2～3万円程度でしたので、「ビッグマン」昭和63年3月号の執筆料も同程度であったと思います。

4 「海江田万里の金のなる本」（甲7）について

(1) 「海江田万里の金のなる本」の出版が企画された経緯、企画の具体的な内容について

「海江田万里の金のなる本」の出版社は双葉社ですが、双葉社との付き合いは特にありませんでしたので、個人的な友人からの紹介か、私の雑誌連載や他の書籍を見たのをきっかけに、双葉社が「財テク」に関する書籍を作る企画を立て、私に話を持ってきたのだと思います。

- (2) 「海江田万里の金のなる本」で安愚楽牧場のことを取り上げるに至った具体的経緯

「危機を乗り越える財テク」と同様に、出版社の担当者が私の過去の記事などを見て安愚楽牧場のことを面白いと思い、取り上げることとなったのだと思います。

- (3) 「海江田万里の金のなる本」を執筆するに際して、安愚楽牧場について行った調査や取材の具体的内容、編集部との打合せ内容、安愚楽牧場との連絡の有無について

「海江田万里の金のなる本」の執筆に際しては、新たな調査又は取材はしていないと思います。

もともと、昭和63年8月頃には私も安愚楽牧場に出資し、和牛のオーナーになっています。私は、調査や取材の結果、自分で投資をしても大丈夫と考えましたので、他人に勧めるだけではなく、自分のお金を投資して実体験しようとしたわけです。

- (4) 「海江田万里の金のなる本」の発行部数、発行時期、印税収入額について

「海江田万里の金のなる本」の正確な発行部数を確認することはできませんが、この本もベストセラーになったという記憶はありませんので、1000～2000部程度の発行部数ではないかと思っています。

発行時期は、奥付のコピーライトに1989年という表示があることやインターネットなどで調べた結果では、平成元年8月頃には書店に並んだのではないかと思っています。

印税収入額についても正確な額は分かりませんが、書籍の場合の一般的な印税額は1冊の単価の8～10%程度でした。

- (5) 「海江田万里の金のなる本」の改訂作業の有無

「海江田万里の金のなる本」もそれほど売れた記憶はありませんので、改訂作業はしていないと思います。

5 「女性セブン」平成4年7月2日号の掲載記事（甲9）について

- (1) 「女性セブン」平成4年7月2日号の掲載記事で、安愚楽牧場のことを取り上げるに至った具体的経緯

私は当時「女性セブン」で連載していましたので、各号毎の編集者との事前の打合せの中で、安愚楽牧場のことを記事にすることになったのではないかと思いますが、具体的にどのようなやり取りによって取り上げる事となったのかは覚えていません。

- (2) 「女性セブン」平成4年7月2日号の記事を執筆するに際して、安愚楽牧場について行った調査や取材の具体的内容、編集部との打合せ内容、安愚楽牧場との連絡の有無について

私はすでにこの時点で安愚楽牧場の和牛預託制度のオーナーになっており、配当金も約定通り支払われていましたので、安愚楽牧場に関する新た

な調査又は取材はしていないと思います。

執筆に際しての打合せですが、「女性セブン」は典型的な当時の雑誌の制作スタイル、つまり、私が口頭で説明した内容をデーターマンがデーター原稿に起こし、それに基づいてアンカーマンがデザイナーの決めた行数・字数で雑誌原稿にするという流れで作成されていました。具体的には、私が「女性セブン」のデーターマンに対して安愚楽牧場のことを口頭で説明し、参考資料として私が安愚楽牧場について紹介した他の雑誌記事や書籍のコピーを渡したと思います。また、データーマンは、自分でも資料を集めますので、そのような資料も踏まえて私からの話を聞き取り、データー原稿にまとめ、最後にアンカーマンがデーター原稿に基づいて雑誌記事を作成することとなります。もっとも、このときにデーターマンと具体的にどのようなやり取りをしたかまでは覚えていません。

(3) 「女性セブン」平成4年7月2日号の発行部数、原稿の執筆料

当時の「女性セブン」の発行部数がどの程度であったかは、今となっては分かりません。

雑誌の原稿料は、この当ても1回につき2～3万円程度でしたので、「女性セブン」平成4年7月2日号の執筆料も同程度であったと思います。

6 「DoLive」平成4年9月号の掲載記事（甲10）について

(1) 「DoLive」平成4年9月号の掲載記事で、安愚楽牧場のことを取り上げるに至った具体的経緯

私は当時「DoLive」でも連載していましたので、各号毎の編集者との事前の打合せの中で、安愚楽牧場のことを記事にすることになったのではないかと思います。具体的にどのようなやり取りによって取り上げることとなったのかは覚えていません。

(2) 「DoLive」平成4年9月号の記事を執筆するに際して、安愚楽牧場について行った調査や取材の具体的内容、編集部との打合せ内容、安愚楽牧場との連絡の有無について

このときも、安愚楽牧場に関する新たな調査又は取材はしていないと思います。

「DoLive」の雑誌制作スタイルも「女性セブン」などと同じ形ですが、「DoLive」のデーターマンと具体的にどのようなやり取りをしたかまでは覚えていません。

(3) 「DoLive」平成4年9月号の発行部数、原稿の執筆料

当時の「DoLive」の発行部数は分かりません。

「DoLive」平成4年9月号の執筆料も1回につき2～3万円程度であったと思います。

7 「サンデー毎日」（平成2年7月22日）の掲載記事（乙1）について

(1) 「サンデー毎日」（平成2年7月22日）の掲載記事で、安愚楽牧場の

ことを取り上げるに至った具体的経緯

私は当時「サンデー毎日」でも連載しておりましたが、「サンデー毎日」は、他の出版社の雑誌とは違い、デザインは単純で、最初から何字×何行で書いて下さいとの依頼があるだけでしたので、私が直接執筆していました。

私は、安愚楽牧場の担当者から「オーナー制度の目的は、都会の人に那須の牧場に来ていただくことにもあり、都市と農村の交流の場を設けることも大切にしたい。」という話を聞いたことが強く印象に残っており、財テクになりつつ、都会と農村のかけ橋になり得るものとして安愚楽牧場のことを面白い投資対象と思っていましたので、そのような理由で安愚楽牧場のことを「サンデー毎日」で取り上げることにしたのだと思います。

- (2) 「サンデー毎日」(平成2年7月22日)の記事を執筆するに際して、安愚楽牧場について行った調査や取材の具体的内容、編集部との打合せ内容、安愚楽牧場との連絡の有無について

このときも、安愚楽牧場に関する新たな調査又は取材はしていないと思います。

- (3) 「サンデー毎日」(平成2年7月22日)掲載記事の中で、安愚楽共済牧場(当時)の預託事業センターの電話番号を掲載した理由、電話番号を掲載するに際しての安愚楽牧場とのやり取りの有無

「サンデー毎日」(平成2年7月22日)の記事で、安愚楽共済牧場の預託事業センターの電話番号を掲載したのは、「BIG TOMORROW」の記事に安愚楽牧場のことを書いたときに、記事を読んで興味を持った人が週刊誌の編集部にお問い合わせをしてくるという話を聞いて、そのことが頭に残っていたことからであると思います。

電話番号掲載に際して安愚楽牧場とやり取りをした記憶はありません。

- (4) 「サンデー毎日」(平成2年7月22日)の発行部数、原稿の執筆料  
当時の「サンデー毎日」の発行部数は分かりません。

「サンデー毎日」も1回につき2～3万円程度であったと思います。

- (5) 「サンデー毎日」(平成2年7月22日)掲載記事で、安愚楽牧場が倒産した場合のリスクについて初めて触れた理由

私は、他の雑誌のデータマンと打合せをするときも、同様の話をしていましたが、雑誌の紙面作りの過程で活字にはなっていませんでした。これに対し、「サンデー毎日」の記事は私が直接執筆していましたので、そのまま活字になったというわけです。

## 8 浅井治氏の陳述書(甲39)について

浅井治氏の陳述書には、現地見学会のバスに私が乗っていたという記載がありますが、これは間違いなく浅井氏の記憶違いです。

私は、昭和63年8月に安愚楽牧場に投資し、和牛のオーナーになっていましたので、現地見学会に誘われてはいました。私も、一度は牧場を見学し



て、自分の牛を見てきたいと思っただけでしたが、多忙で行くことができずに  
いました。私はそのことを残念に思っていましたので、安愚楽牧場の現地見  
学会に私が参加していないことは間違いのない事実です。

私が安愚楽牧場の現地見学に行っていないことは、「サンデー毎日」（平  
成2年7月22日）の記事に「私は残念ながら自分の牛にはまだ対面してい  
ません」とはっきり書いていることから分かっていただけたと思います。

以上